

## 21世紀を思う

若狭 良治

一九九一年一月一日から十年目、二〇〇一年一月一日。  
これが二十一世紀の始まりである。

「二〇〇一年宇宙の旅」とかい映画があったが、果たして、  
あと十年で、宇宙旅行ができるであろうか？

私が子供であったころ、いや最近（十年ぐらい前だったか？）  
まで、一月一日付の新聞（大晦日の夜に配達される分厚い新聞紙）  
には、何時も未来が漫画で画かれていた。そこには、科学の発展  
が明るい未来であるように、科学万歳の図であったように記憶し  
ている。

さて、現在我々の意識はどうであろうか？

新聞を見ると、将来一ギガ（十億）ビット級メモリーが登場す  
れば、一挙に現在日本が優位にたっている製造装置生産の面で、  
アメリカ企業優位に逆転する可能性をもっているとの予想が載っ  
ていた。つまり、アメリカより日本が優位だと思っている分野で  
も、発想などではアメリカの方がはるかに経営資源が豊かである  
ということである。昔の切り抜きの中で、「八八年二月二五日の  
日経産業新聞に九〇年には一六Mビットの超LSIが商品化され  
るとの記事があり（事実そうだった）、一六MビットDRAM  
以降の次世代開発競争には絶対負けられない」という日本のメ  
ーカールの意見が載っていた。そのちょっと前には、理論的には六  
四MビットDRAMまで開発が可能との記事を読んだ気がする。

このような記事に接すると、科学技術の発展はどこまで可能な  
のかということを考えてしまう。現在、記憶媒体として、  
フロッピーが外部記憶の手段としてポピュラーになっているが、

一六、三三、六四Mビットとなってくると、一生の間、一切の外  
部記憶装置など不要の軽量携帯ワープロなど実現していく訳で、  
いろんなものが商品化されていくのではと楽しくなる。

しかし、ここ数年、将来についての「夢」を語る、あるいは表  
現するということになると、決して明るく語るものが少なくなっ  
たのではないだろうか？

改めて、一月一日の新聞末に目を通してみた。

「地球と人間」「生きるということ」「地球再生託す宇宙の光」  
「人にやさしい社会へ」「より高度に」「より便利に」「レジャ  
ー」「仕事」「愛」「みなさま、二十一世紀をご用意を」「定年  
後って働き盛り／女性のユーターン」等々である。

これが世紀末現象なのであるか？それとも、将来があまり明  
るくないということ、肌で本能的に感じ取ってしまったのであ  
ろうか？浮かれている時代は終わったのか？

一言で言えば、「ミエテシマッタ」のか？

それとも、政府の消費税を導入する際に過度に宣伝された「高  
齢化社会の暗い世界」に対する無力感がなす業か？

これもいささか「いかさま」であろう。六五才以上を勝手に働  
かない人口として括り込み、その比率が高くなるから大変だとい  
う乱暴な議論がまかり通ってきた。今でもそうだ。

しかし、現在だって、六五才以上で働いている人は多いし、今  
後も当然多くなっていく訳で、むしろ六五以上の人による新しい  
ビジネスがどんどん生まれてくるのではないだろうか？

高感度のおじいちゃんがいる所で活躍するのではないか。

今年の年賀状で、ワープロで書いたものが二〇%以内であったら「おじん・おばん」で、三〇%を超えていたらまだまだ若いということである。

自分の年賀状を数えていないが、なんとなく数えたくないような気がするの、そのこと自体が「おじん症候群」か。

なんとも愉快ではない。これも私が歳をとったからか？

さて、テレビのCMに「働いて働いて」という、未来に向けて働いても結局はその恩恵を受けないでおさらばしてしまうことがいかがかという感じで、なんとなく耳にひっかかるものがある。

バブル経済の進行の中であぶく銭を手に入れた人もいるだろうが、結論で言えば、この東京首都圏では家をもてなくなってしまう人たちが、現世での豊かさの享受という面で一見華やかな生活を謳歌している。

この点では、家のローンに追われてやっと定年頃借金が終わるか、結局は子供たちに気の遠くなるような歳月を親と同じローンの返済を課してしまうような状況では気が重くなってしまう。

そんなことを考えていると、親に比べて、子供たちの方がもっと現世利益を享受する術を見つけていっているし、お金の使い方も計画的な気がする。

子供たちの親に対する評価も、高校生や中学生にとつては、家を持つていることに対する価値観より、何も楽しいことが無かったなどという評価にもなってしまうのではないだろうか？

そんな中で、ファミコンの世界に没入して、現実と想像の世界の境目が定かでないような事態。宗教的なもの、神秘的なもの

のに対する憧れも一段と強くなっているし、信じる者も増えているようだ。

二十一世紀を改めて考えると、「現在は平和だ」という評価の恐ろしさ、残酷さを感じてしまう。

現在は本当に「平和」なのだろうか？ただ、日本国内でいわゆる「戦争」というものがおきていないだけで、その実は「戦争状態」なのではないかと思ってしまう。

言うなれば、徳川幕府三〇〇年の平和はなにを日本にもたらしたか？

いま、第二次世界大戦後五〇年になろうとしているが、この間の地球破壊の速度は過去何百年の比ではない。これでは、二十一世紀を楽しく語るのに悲観的すぎるかもしれないが……

こんな事を考えているうちに段々楽しくなってきたので、どうしようかと改めて考え直してしまおう。……！！

限り無い地球資源ではなく、限りがあり、いくつかは二十一世紀に枯渇するものもあるという。自然の緑も現世利益を優先する中で大変なスピードで砂漠化しているという。

あんまりのんびりもできないが、何かをしなければという焦りもある。じっくり考え、行動するときか……。

わかさ・りょうじ

出生地 満州ハルビン

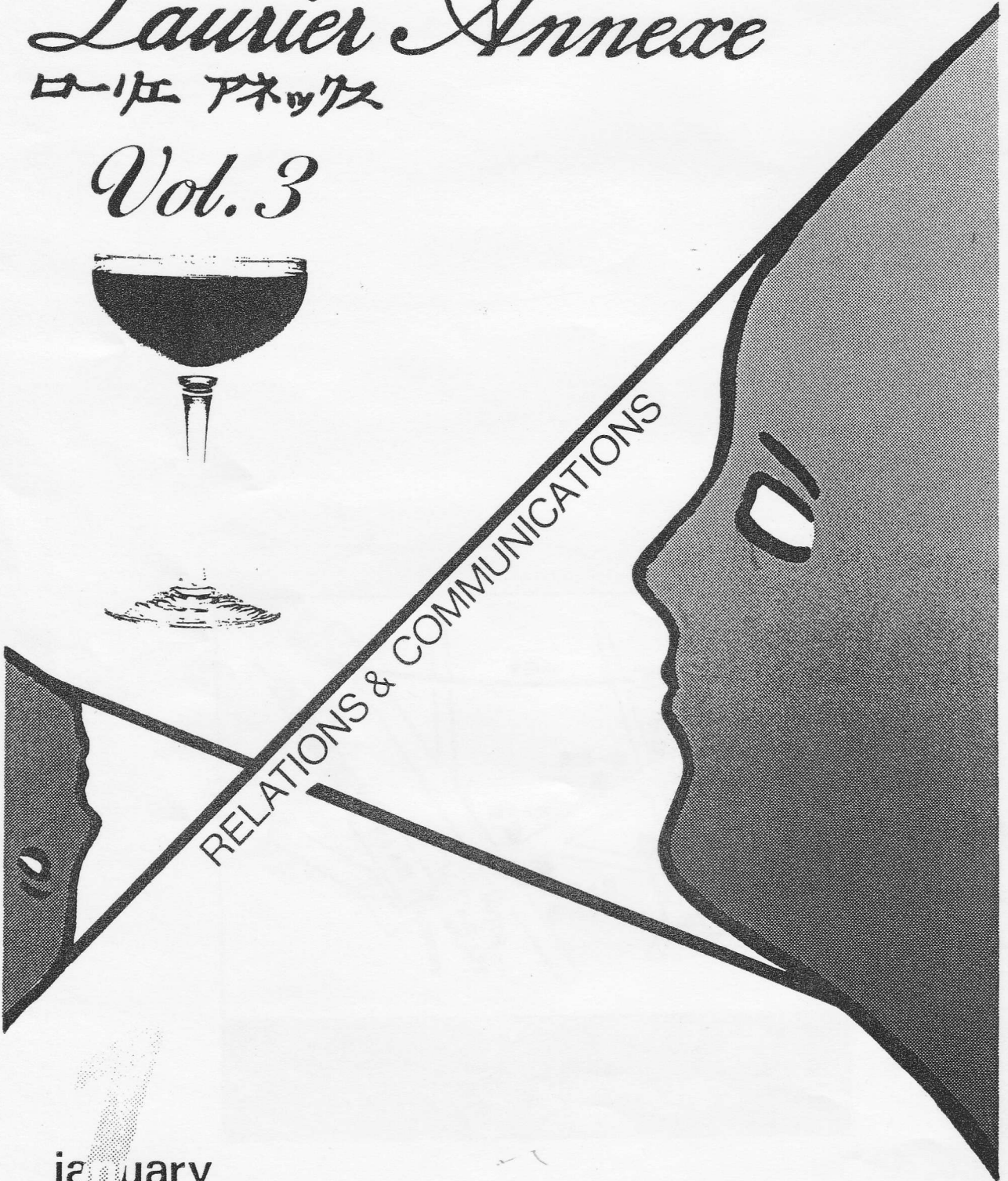
生年月日 一九四四年八月二九日

勤務先 日本生活協同組合連合会

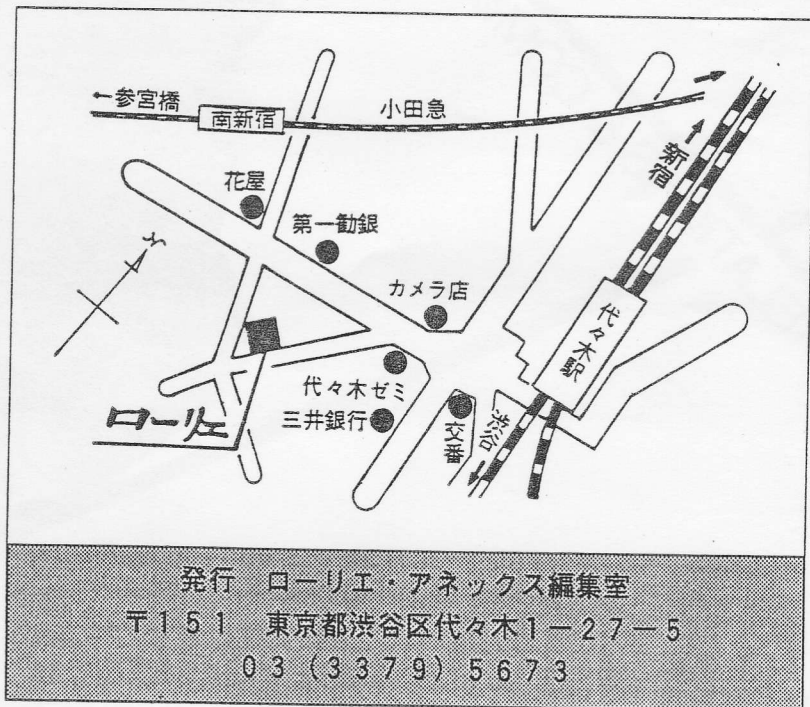
# Laurier Anneece

ロ-1E アネセ

Vol. 3



1  
January  
1991



発行 ローリエ・アネックス編集室  
〒151 東京都渋谷区代々木1-27-5  
03 (3379) 5673